

「ヨーロッパ化」と新たな<界>への接近——EU 研究における社会学

伊藤 り

(一橋大学大学院社会学研究科教授、EUSI 元執行委員)

EU 研究において社会学は、「研究の対象を変えると同時に、ヨーロッパ化についても、従来とは異なった理解を提供することになる」——こう述べるのは、*Sociology of the European Union* (2011) の編者、A. ファヴェルと V. ギロドンである (Favell, Guiraudon, eds. 2011:3)。

EU 研究を牽引してきたのは、国際関係論、国際政治学、国際機構論、国際法といった学問領域だが、そこに社会学はどのような新しい視点をもたらしうるのか。「研究の対象を変える」とはどのような意味か。「ヨーロッパ化」に関する「異なった理解」とはどのようなものか。

同書によれば、従来の研究は EU の制度、政策、主体を対象としてきたが、EU の社会学はそうした制度、政策、主体を所与のものとして研究するというよりは、むしろ地域統合を通じて、それらが、またヨーロッパ諸社会が、どの程度「ヨーロッパ化」したかを捉えていく。「ヨーロッパ化」という概念については諸説あるが、一般的には、これまで加盟国の権限下にあった農漁業政策、環境政策、社会政策、科学技術政策といった個別政策領域が徐々に EU の権限下に入り、共通化するという意味で用いられてきた。これに対して、EU の社会学はその意味を拡張し、制度、政策、主体、あるいはまた、ヨーロッパ諸社会にどの程度、ヨーロッパ固有の力学や構造が出現しているかに注意を向けるという。たとえば、階級構造でいえば、はたして各国の階級構造を超えるような、ヨーロッパ独自の階級構造が見いだせるかどうか。高学歴層加盟国市民のヨーロッパ・レベルでの地理的移動と社会移動のパターンをエスノグラフィの手法を用いて追ったファヴェルの著書、*Eurostars and Eurocities* (2008) は、そうした関心を反映した企てのひとつである。同様の方向性は、共同研究「<下からの>ヨーロッパ統合のパイオニア——EU 加盟国、及び非加盟国市民のモビリティとヨーロッパ・アイデンティティの出現 (PIONEUR)」(1998~2002) にも認めることができ、このプロジェクトの題名が示唆するように、そこには<上からのヨーロッパ化>とは区別される<下からのヨーロッパ化>へ注目がある。

EU の社会学の試みは、D. ジェオルガカキス編による論文集、*Le champ de l' Eurocratie* (2012) にもみられる。EU 官僚や欧州議会議員ら、EU の公職就任者たちの政治社会学を 9 めざす同書は、題名「ユーロクラシーの<界>」が示すように、P. ブルデューの<界>の概念に依拠している。ユーロクラシーの<界>は「加盟国、もしくは社会的・経済的利害を代表する諸機関・諸制度の成員や、欧州委員会に多少とも専従として勤務する専門職の人びとなど、異種混合のエージェント」が集まる「ハイブリッドな空間」であり、そこで、これらのエージェントは「EU の意味や統治するうえでの正当性の基盤を定めるため、恒常的に闘争を繰り広げている」(Georgakakis ed., 2012:6)。このユーロクラシーの<界>において、文化資本、経済資本、社会関係資本、あるいは象徴資本のうち、いかなる資本が価値づけられ、また、これらの資本の諸形態はいかなるハビトゥスを具現化しているのか——こうした一連の問いが作業仮説的に立てられている。

筆者自身は、現在、共同研究の仲間と協力して、フランス、イタリア、ドイツ3ヵ国における移住家事労働者の処遇に関する調査を行っている(科研費基盤研究(A)「EU 統合下の移住女性とケアの政治」課題番号 24252003、

研究代表者:伊藤るり)。その過程でも、各国の状況をこえて、EU レベルでの共通移民政策がもつ影響力(<上からのヨーロッパ化>)と同時に、移民支援 NGO や欧州労働組合連合(ETUC)が欧州議会と協力しながら、共通移民政策に働きかけるようすに触れてきた(<下からのヨーロッパ化>)。移民政策に関するかぎり、たしかにヨーロッパの<界>のようなものが立ち上がっていると感じている。この動きは、2000 年代半ばころから、また欧州議会が理事会との共同立法権を獲得したリスボン条約発効(2009 年 12 月)以降、特に顕著となった変化とみられ、それは EU の社会学が台頭する時期にもほぼ符合している。とはいえ、ヨーロッパの<界>をつかむのは容易ではない。どのように研究対象を設定、構築すれば、社会学として有効な研究となりうるのか、このあたりが大きな課題だと考えている。

なお、2 週間後に予定される欧州議会選挙では、反 EU を掲げる各国の極右政党が勢力を伸ばすとの予想があり、EU 共通政策という意味での「ヨーロッパ化」には、今後ブレーキがかかる可能性もある。だが、反グローバル化もグローバル化を進めるという逆説と同じように、反 EU もまた<下からのヨーロッパ化>の一端を担っているといえなくもない。反 EU 勢力の欧州議会への「参加」には、短期的にはいざ知らず、長期的にみれば、そのような意図と結果が必ずしも一直線には結びつかない捻れた関係が埋め込まれているのかもしれない。予断を許さない状況ではあるが、両義性に富んだ過程であることはまちがいない。